

JA総合研究所Webサイト「研究員レポート」

2008年3月6日

飼料米の普及に向けて：生活クラブ生協の取り組み

社団法人JA総合研究所 客員研究員 和泉真理

これまで「所長の部屋」で紹介してきた、飼料米への取り組み（第24回～第29回）。山形県遊佐町で生産された飼料米を用いて（株）平田牧場で育てた豚を、生活クラブ生協で購入している。そこで今回は、この取り組みの川下側である生活クラブ連合会の加藤好一会長、赤堀和彦開発部畜産課長に、取り組みの内容や課題、消費者の反応を伺った（取材は2008年3月4日に今村奈良臣研究所長と和泉が行った）。

なお生活クラブ生協は、組合員が30万6000人、年間売上げは800億円。傘下に東日本、特に首都圏を中心に30の単協がある。

1 2008年の飼料米給与計画

「こめ育ち豚」については、前年産の飼料米を翌年給与するが、2007年の飼料米は130haで69万1190トン。これを2万7473頭の豚に与え、このうち平田牧場が他に販売する875頭を除いた2万7000頭弱を生活クラブ生協が販売している。2006年の飼料米生産は63ha。2008年は150haを予定している。

また、現在の飼料米の給与比率は10%だが、今年は飼料米の比率を50%にまで上げた試験を行っているところだ。

飼料米生産の面積をもっと拡大したいが、交付金が頭打ちとなる問題がある。飼料米専用品種の開発も必要であり、来週も古川農試に行くが、とにかく量のとれる品種を開発してくれと頼んでいる。大豆の後に植えると良いような飼料米の品種が出ると良い。今の面積のみを対象とした配分も問題であり、多収に向けたモチベーションが上がるようなシステムにしてもらいたい。面積だけ、収量だけでは上手くいかないと思うので、遊佐町で実験を重ね、良いルールを作っていければと思う。遊佐町の生産体制も、もっと集約化、団地化しないと、

今のようならばらの圃場での取り組みではいかにも非効率である。

何よりも、飼料米について社会で一般化していくことが重要だ。

2 「こめ育ち豚」とその他の枝肉との価格、販売の違い

飼料米の買入れ価格は46,000円/トンであり、トウモロコシ給与に比べ、枝肉ベースで3.2円/kg高い。昨今のトウモロコシ相場の高騰で、この差は縮小しているが、他方、飼料米への交付金の削減が課題。畜産対策での飼料米支援にも期待している。

現在豚肉の約10アイテム中1アイテムを「こめ育ち豚」として販売しており、これについては区分管理し、3.2円のコスト差をのせた価格で販売している。数量が限定されるので、2部位のセット販売で冷凍扱い（他の精肉はチルドで部位別）という制限もある。飼料米が生活クラブで扱う6万頭全体まで広がらないと、通常の前肉と同様の販売に切り替えることは難しい。飼料米を給与した豚肉が通常アイテムに混ざっている場合もあるが、この場合には飼料価格差は乗せていない。

「こめ育ち豚」のチルドは、生協の店舗では販売している。

協同購入用の肉の加工は全て酒田（平田牧場）で行っており、店舗用だけ高崎でトレイのパック詰めなどを行っている。

3 消費者の反応

「こめ育ち豚」導入初期に、購入した組合員に対して行ったアンケート（1万配布、1200回答）によれば、78.7%がおいしいと回答し、84.7%が今後同様のアイテムを申し込むとしている。ただし、これはあくまでも生活クラブの組合員対象であり、豚肉は利用率が2006年には71.5%と生活クラブの商品の中でも特に人気の高いアイテムであることを考慮すべきである。普通の消費者の反応とは違うだろう。

生活クラブの豚肉全体の取扱量は、前肉用6万頭、加工用2万頭である。取扱量は去年の6月までは微増できていたが、昨年10月以降単価を値上げしたので、一時的に量が減り、いままたもどってきている状態だ。

4 生活クラブ生協による米の協同購入

飼料米以外にも、生活クラブは遊佐町から米を10万俵購入している。生活

クラブの米は、遊佐の他、栃木・J Aなすの、長野・J A上伊那など東の産地から。もち米は岩手の一関から購入している。ササニシキは5000俵程度扱っているが、産地（庄内）が温暖化のせいか生産に適さなくなっており、平地から中山間地に移っている感じだ。